熊本大学学術リポジトリ

和歌 ： 文苑

著者	哲人，旭麓，蘆月，江楠生，溪川生，やまびと
雑誌名	龍南會雑誌
巻	５５
ページ	４４-４７
発行年	1897-03-30
URL	http://hdl.handle.net/2298/4804

三

かゝる淋しき深山路も
人やすむらん朝げたく
けぶりの末のかつ見えて
何處なるらん杣木てる
音の木精に響くなり

四

尾山にかゝる白雲は
花にやあらん吹く風に
匂ひ床しく音つれて
霞にむせぶ雁金の
聲は雲井に二つ三つ

五

八重の霞に鶯も
蹈みや迷へる溪の底
聲は幽に音づれて
歸りかゝれるこの身をば
去ばし留むる如くなり

哲人

春水

むすびねし水もけさはとけそめて漣たてりさる澤の池

鶯

鶯の初音待ちえて梅のはな今一しほのいろまさりけり
殘りゐし高根の雪は消えはてゝ鳴音のとけき谷の鶯

春雨

春雨の霞める軒にうちけふりくるともわかぬ夕へさひしも

池邊柳

池水にかけをうつせる青柳の糸にそ春の色は見えける

春雨　旭麓

人知れす春しりそめし若草に音さへしのふ春の雨かな

霞

空寒き雪けの雲の立ち消えて遠こちかけてかすむ今日かな

鶯

梅枝の香をなつかしみ鶯の千代のかさしとなくそ嬉しき

嬉しき物　蘆月

世の中にうれしきものは旅の中に故郷よりの親の玉章

樂しき物

埋火をかきれこしつゝ思ふとち昔をかたる夜半のたのしさ

悲哀き物

行末をたのまんまな子先立し親の心やかなしかるらむ

佗しき物

壁はやれ軒かたふきし賤かやにたつる烟も心はそしや

哀なる物

村まつりよき衣きたるちこの中につゝりをわふる賤か孤子

鶯出谷　江楠生

春立ては谷間をうとみ鶯もきつゝ鳴くなり庭の梅か枝

鶯の初音のとかに聞ゆなり谷の古巣を今や出つらん

霞添春色

野も山もそれともわかす梓弓春を深めて立つ霞かな

雲雀幽

春霞立田の野邊の空高く幽に見えて鳴く雲雀かな

山家春雨

つれ〳〵に木の茅春雨降りはへて訪ふ人もなき山蔭の庵

待花

谷河の波の初花うち出ぬ今幾日ありて櫻咲ろなん

都春月

長閑を柳にしめて霞むかな都大路の春の夜の月

人とよむ都の春の中空に靜けくすめる夜はの月かけ

治世文事興

波風もさはかぬ御代はあまの子も學ひの海に玉そあされる

吹く風も枝を鳴らさぬ御代なれは文の林の日に繁り行く

塵袋を探りて二つ三つ

梓弓はるをそむけて行雁のゆくゑこひしき故郷の空

音に出てゝなくなる虫の心をや哀ととしもいさよひの月

溪川生

ゑるやいかに聲ふりたてゝ鈴虫のねになきいつる人もありけり

臼杵の海よする渚の波の音を君は心に何と聞くらん

水無月の照る日の色に咲きいてんを年ふる里のなてしこの花

やまびと

遠山霞

うす墨の繪にも似たりや麓路をれはろになして霞む遠山

棹姫の花のすかたやかくすらん春のみ山は霞たなひく

若　菜

出て見よ里の乙女等打つれて雪の消間に若菜つむなり

たらちねのためと思へは何かあらん雲かき分けて根芹つむとも

俳句

春戸口の棄菜に迷ふ胡蝶かな　秋琴

君言はず花こゝろなく散りかゝる

酒醒めて夜寒奇なり春の雪　蘭溪

春雨のふる夕暮や渡船

奥ゆかし短冊たるゝ花の枝　白兎

春風や勇士の墓表三千基

増荒雄の魂かはる梅の花

さらでだに眠たきものを春の雨